

我、 鉄路を拓かん

最終回

梶よう子

最終章 繋がる夢

一

「芝、高輪の漁師らから要望書が提出される。僕はね、これが必要だと思っていたんだよ」

井上は我が意を得たりという表情でいう。弥市と久治郎、そして森田屋も首を傾げた。反対の要望書か嘆願書かしらねど、届け出なごされれば、事はますます面倒になりそうだ。

「正直にいうと、僕は反対派を切り捨てるつもりでいた。いちいち耳を傾けていたら、工事など出来やしないからね。しかし、鉄道は国のためであるが、民のためでもある。奇しくも平野屋さんがいったよね、弱い者いじめになっちゃいけないと」

「それは、まあ、あるお方の受け売りですが」

と、久治郎が膝を乗り出した。

「町人と国が話し合って、その要望を受け入れるということになれば――」

森田屋が感心したように首を縦に振る。

「ああ、江戸の頃でいやあ、お上がおれたちの暮らしを考えてくれたと感激しちまうってわけか」

「そう、そういうことです。こちらも苦情を聞き入れたいと譲歩すれば、頑かたく々な人々の気持ちも和やわらぎ、ただ反対と声高こわだかにいうだけではなく、話し合いが出来る。確かに、芝から品川つづみまで堤つみを造れば、海が分断され、舟を出すことはまず不可能になる。それでは、このあたりの人々の暮らしをまことに潰つぶしてしまふ。僕もそれは避けたい」

かつては、世情が不安定になり、不安や不満が高まると、打ち壊しや一揆いっぎが頻発ひんぱつした。天災などによる飢饉ききん、物価高騰こうとうに対し、庶民は騒動を起こして訴えるのが常であった。

「実際、工事の妨害が始まった。これでは、とても近代国家とはいえない。鉄道は国の事業だ。民を蔑ないがしろにしては、協力も賛成も得られない。だから僕は、町役人ちやうやくにんに交渉した。堂々と要望書を出してくれとね。これはとても画期的かつきてきです」

は？ 久治郎が呆あきれたような声を出す。

「井上さまが届け出するよう持ちかけたんですか？ そいつはず

る賢い」

それを聞いて、井上がむっと唇を尖らせた。

「それは心外だな。僕は反対するにも手順を踏んでくれと頼んだのだよ。何も江戸の昔のように駕籠訴をしろといったわけじゃない。

そこで、鉄道掛でもいいが、東京府の知事に届け出るのもよからうと」

「で、そういう動きがあるのを見越して、こちらから堤と堤の間に橋を架けてはどうかと、持ち掛けるわけですね？」

弥市が問うも、井上がいきなり立ち上がり、

「これから話し合いに行く。もう先方も集まっているだろう。どうせ、八ツ山の切り割りが出来ないんだ。弥市さんたちも暇だろうか。さて、酒はどれだけ必要かねえ」

さも楽しそうに言って、座敷を出る。弥市たちも慌ててその後を追うように立ち上がった。

指定された寺の本堂に赴く。高輪と芝の町役人と漁師や魚屋などがずらりと三十名ほど車座になつて待ち構えていた。

弥市たちが足を踏み入れると、射るような眼を一斉に向けて来る。密やかに微笑みを浮かべる仏を背にした町人たちのほうは、憤怒の表情だ。殺気立つとはこういうことであろうと妙に得心した。本堂内の気も重い。

「まるで一揆の寄合だねえ」

森田屋が耳打ちしてきた。弥市は、ああと首を縦に振る。こりやあ、難儀だ。知人、顔見知りもいるから、町人である自分が間に入れば、なんとかなると井上に安請け合いをしてしまったのを大いに後悔した。これは駄目だ。弥市は知った顔がないかと、チラチラと窺う。血の気が引いた。芝田町の家に入りをしている魚屋がいた。芝の町役人も知り合いだ。難儀どころか、政府の犬とばかりに、こつちに火の粉が飛んできそうだ。弥市は井上の背に隠れて、俯きながら腰を下ろした。

「お待ちせしました。僕は鉱山正の井上勝です」

と、髭面で屈強な身体をした男が怒鳴った。

「鉱山ってなんだよ！ 鉄道掛の役人じゃねえのか。馬鹿にしゃがんで」

「おう、その通りだ。なんで蒸気車の役人じゃねえんだよ」

隣にいた男もすでに喧嘩腰だ。

「まあまあ。僕は皆さんに知恵を授けにきたんです。とはいえ、この十月に僕は必ず鉄道に携わる。しかも、偉くなる」

と、胸を張る。工部省に設置されるという鉄道寮のことをいっているのだ。おそらく井上がそこで高職に就くことは間違いない。

「ですから、僕と話をしておけば、なにかと便利だ。さて」

と、井上はキョロキョロとあたりを見回した。

「皆の衆、鉱山正さまに席を空けなさいよ」

町役人が手を振ると、皆が渋々、腰を浮かせた。その間に入った井上はあぐらを組んで座り、まずは皆の顔を確かめるように視線を走らせてから、口を開いた。弥市たちは、井上の後ろに控える。

「まずは蒸気車がいかに素晴らしいものか、お話しいたしましょう」
「ふざけんな！」

「こちらら商売休んで来たんだぞ」

井上に遠慮なく罵声を浴びせる。しかし、井上は平気の平左。反応は予想通りといわんばかりで、蒸気車についてとうとうと語り始める。

弥市は顔を伏せつつ、皆の反応を見る。ともかく蒸気車は自分たちの暮らしを奪う敵である、要らないと思っている者たちに、井上の熱意が伝わるとは思えない。果たして首筋を掻いたり、天井を見上げたり、耳の穴をほじくってみたり、真面目に聞く者などいなかった。

「皆さんのお怒りはごもつとも。しかし、鉄道敷設のために土地を追われる人々もあります。だが、このあたりはそれをせずともよいのですよ。海の上を通すのですから」

と、ひとりがあからさまに不服を顔に表した。

「ああ、わかります。それよりはマシだと考えろ、と僕がいうと思
いましたか？ 残念ながら違います。僕は皆さんの暮らしも守り、
蒸気車が憎き仇となることも避けたい」

「そんなうまい話があるか！ 堤が出来りや海が塞がれちまうん
だぞ」

「このあたりの者は海に頼って生きているんだ。それが奪われちま
ったら死んじまう」

井上が、ニヤツと笑って、懐ふところから絵図面を取り出した。

それを輪の中心で広げると、町人たちが、なんだなんだと首を伸
ばす。

「これを見てください」

井上が絵図面を指差すと、皆が訝いぶかる。

「二十四町ちよう（約二・六キロメートル）の長さの堤の間に橋を架け、
水路を通し、海と浜を繋つなぐのです。つまり通船口を造る。これなら
これまで通り漁に出られます。今の海岸縁べりは、舟を留とめる場として
利用する。築堤ちくていが背後に横たわっているため、大嵐が来ても舟が流
される心配もない」

町役人が食い入るように絵図面を見つめ、はっとした顔をする。

「鉱山正さま、この絵図面では高輪にしか橋がございません。これ
では、とても得心出来かねますよ」

そうなんだ、と井上はさも困った顔をする。

「僕は江戸の生まれではないし、このあたりについては正直わからない。そこでぜひ教えてほしいのだが、堤に幾つ橋を渡せば、いいものかな？」

さあ、考えてくれ、と井上がばんばんと手を打つと、それが合図だったかのように皆が絵図面を見ながら話し合い始めた。

「いつの間にか井上さまに丸め込まれているねえ」

森田屋が感心したようにいった。久治郎も頷く。

「漁師や魚屋に考えさせれば、無理やり納得させられたとは思わないからな」

弥市も腕を組んで唸る。

半刻ほんとき（約一時間）ほども経たつただろうか。喧々けんけん諤々げくげく、がなり声や罵のしりが飛び交かい、心配になったが、ようやく話し合いが終わり、四つの橋を架けることに決まった。

「四橋、承知した。民の要望を国が受け入れ、一番良い方法を考える。これから鉄道は日本中に延びていく。こうした民の声はこれからも多く出てくるだろう。今日のこの寄合が良い手本となる。かたじけない。心より感謝する」

井上は背筋を伸ばし、深々と一礼した。

慌てたのは、町人たちだ。ふたりの町役人が「どうかお顔を上げ

「てください」と、懇願こんがんするようにいう。井上はさつと面おもてを上げると、
「酒だ、酒を持って来い！」

と怒鳴った。

本堂の外で待ち構えていた常吉つねきちと、久治郎の奉公人が酒と仕出しの肴さかなを持って来る。たちまち宴うたげとなった。

あつという間に座は賑にぎやかになり、井上は蒸気車について再び語り始める。すると、井上の顔をまじまじ見ていた若い男がいきなり声を上げた。

「思い出した。あんた、ちよいと前に、茶屋ちややだの湯屋ゆやだの床屋とこやだの蒸気車の話を聞かせて歩いていたお人だな。洋装で髷まげもねえのになんで床屋にいるのかと不思議だったんだが」

「おう、覚えていてくれたか。そうだよ、それは僕だ」

「役人のくせに変なお人だなあ」

どつと笑いが弾はじける。

「けれど、蒸気車が走る橋の真下を舟で潜くぐるなんて、羨うらやましいなあ」
と、井上はうっとり目尻めじりを下げる。

「なら、おれの舟に乗せてやるよ、旦那だんな」

最初に声を上げた髭面の男がいう。それは嬉しいうれい、と井上は男の湯呑みに酒を注つぐ。

「鉾山正さま、橋を渡すことで、このあたりの者たちの暮らしが守

れると安心いたしました。が、工事の間は漁に出られません。それはどうお考えで？」

芝の町役人がおずおずといった。

築堤は二つの区域に分けて行われるが、それぞれに半年、もしくはそれ以上、生業なりわいを奪うことになる。

「それについては、僕の後ろに控えている平野屋、安達屋あだちや、森田屋の請負人うけおいにんたちが良い方策を考えているから、安心なさい」

井上から、いきなり下駄を預けられ、三人は呆気あつけに取られる。

「あ！ 平野屋さんじゃねえか！」

「わあ、弥市の旦那」

数人が驚いた顔をする。弥市は、はははと照れ笑いを浮かべた。はてさて、漁師や魚屋たちをどうしたらよいものか。弥市が困惑して久治郎と森田屋を窺うと、ふたりはどこ吹く風という顔をして酒を呑のんでいた。

八ツ山と御殿山ごてんやまの切り割りがいったん取りやめとなっている間、鉄道掛は百姓と商家の用地買収ほんせうに奔走した。だが、海軍省は相変わらず首を縦に振らず、とうとうモレルが痺しびれを切らして、伊藤博文ひつぶみに「このままでは開業が遠のく」と苦言ていを呈した。

あからさまな妨害は切り割りの中断で収まっているが、東海道沿

いに建ち並ぶ町屋まちやではまだまだ反対を唱える者が後を絶たない。再開すれば、またぞろ一悶着ひとしもんぢやう起きるのではないかと、弥市は心配していた。

片や、横浜は着々と工事が進行している。

すでに秋に入ったが、未だ夏の陽射しが残っている。とはいえ、何もしていなかったわけではない。いずれ工事は始まる。人夫の不足をすぐに補えるよう、新たに人を集める肝煎きまじりをひとり雇い、嬉しいことに旧知の尾張屋嘉兵衛が手を貸してくれることになった。

芝、高輪の漁師たちからは舟を借り上げ、漕ぎ手として雇うことが決まった。希望する者には人夫としても入ってもらおう。鉄道が開通しても生業が続けられること、工事中も働けることで、町役人も皆も納得してくれた。森田屋が仕事の幹旋あつせんを引き受けてくれたのだ。そんななか相模屋さがみやに請負人たちが集められ、隣に座った森田屋に弥市は、

「横浜は人家が少ないところを通すから、立ち退きさせるのも楽だったようだ」

と、ついぼやいた。

「高島屋さんから聞いたのかね？ まあ、こちらら兵部省が相手だからねえ」

弥市は、まったくだ、と頷いた。確かに、鉄路は、海上の築堤か

ら陸に上がるとき海軍用地を貫く。要するに、その用地を潰して鉄路を通すのだから、気に食わないのも重々わかる。が、嫌だ、困るでは、埒が明かない。

と、扇子を手にして首許を扇ぎつつ、工事割付役の大竹宗保が座敷に入ってきた。

いやいや、暑い暑い。遅れてすまなんだ、といいながら腰をおろし、

「早速だが、ようやく兵部省が軟化し始めてな、八ツ山と御殿山の切り割りもまもなく再開出来るだろう」

と告げると、おお、と請負人たちから声上がる。弥市と森田屋、久治郎も顔を見合わせ、頷き合った。

「まもなくというのはいつからでしょう？ はつきりとはわかりませんか？」

久治郎が膝を進めた。大竹が唇を歪める。

「いきり立つでない。鐵路が敷かれるのは、海軍の陣所が置かれてるところだ。その引越しもあるのだから。遅くとも九月には、あたりの用地買収も終わり、山の切り割りが再開出来る」

ううむ、と皆が唸る。

さて、と大竹が、これまで決定したことを皆に告げる。

「蒸気車を走らせる軌道であるが」

軌道の幅には、広軌道（一・四三五メートル）と狭軌道（一・〇六七メートル）の二種類がある。日本の地は高低差があり、平地が少なく、土地が狭いことにより、狭軌道を採用することになった。モレルは一刻も早い開業を目指すため、そして費用面で安価であること、大隈重信に薦め、決定した。

軌道の下に置く枕木は当初、英吉利国から鉄製の物を輸入するはずであったが、日本には豊かな森林があることから、硬質な檜、松を使用することになった。肝心要の蒸気車の他、線路などの資材はすべて英吉利国からの買い入れだ。大竹の口調から察するに、枕木を国内で調達することで、政府には、少しでも費用を抑えたいという思惑があったようだ。

「線路と枕木を置く路盤の上には砂利を敷き詰める。これを道床というが、鉄路の敷設はともかく本邦初のことゆえ、お雇い外国人による差配となる。むろん、通詞が付くゆえ、安心せい」

弥市の頭の中で、線路が敷かれる様が具体的になってきた。築堤の天端（上部）、路盤をしっかりと造らなければと、思いをさらに強くした。

それから、と大竹は、使用する木材、石材について話し始めた。「木材については、東京の材木商が請け負った。目黒周辺の百姓や、東海寺にも樹木の伐り出しが命じられる。手伝いを求められたら応

じてほしい。石材は、横浜の高島屋の推挙でな、やはり横浜の者が
請け負った。相模の根府川、伊豆から順次運ばれることになる」

弥市は眼を見開いた。嘉右衛門は、おれたちが真鶴村に石材の調
達を請け負ってもらったことは知らないはずだ。知っていれば、そ
のような真似はしない。と、

「お待ちください。あつしらは真鶴村の青木という者にすでに石材
を……」

森田屋が声を張った。大竹が、首を傾げる。

「そのようなことは聞いておらんが」

相模屋の重太郎が苦笑した。

「ああ、そうだったなあ。たしか真鶴の六ヶ村かあ。大仕事を請け
負って、張り切り過ぎたあんたらの先走りだな」

「馬鹿な！ 四万本の石だぞ。とつくに採石が始まっているんだ。
小田原のお偉い方にも話は通してあるんだ。今更、断ることなんざ
出来ねえ。重太郎さん、この話を上のお方には話していなさらねえ
んで？ 大竹さまもご存じねえんで？」

いつもは穏やかな森田屋が大声を上げた。真鶴村に頼みにいった
のは森田屋だ。重太郎が顔に血を上らせる森田屋を一瞥して、口角
を上げた。

「こいつは、お国が決めたことなんだ。おれたちが口出し出来ねえ

よ。ともかく石はそういうことだ。遅れを取り戻すために、ちやつちやと進めなきやいけねえんだ。真鶴の六ヶ村への金はあるたらの負担だ。それから砂利は、横浜の鹿島岩吉かじまいわきちが請け負ったつてことでよろしいですね？ 大竹さま」

「ああ、そうだ」と、大竹は事の次第が飲み込めず曖昧あいまいに応じながらも、口を開いた。

「何か行き違いがあったようだが、その件は森田屋でなんとかしてくれ」

冗談じゃねえ、と森田屋が拳こぶしを震ふるわせ呟つぶやいた。弥市は、森田屋の肩に手を乗せ、小声でいった。

「こいつは、重太郎さんのしくじりだ。あるいはおれたちへの嫌がらせだな」

「ああ、そうに違いねえ」

森田屋は切れるほど唇かを噛み締める。

真鶴村へ石を頼んだことを告げたとき、勝手なことをと食くってかかって来た。弥市は重太郎へ至極しごく真つ当な意見をしたつもりだったが、それが気に食くわなかったとでもいうのか。その意趣返いしゆがえしならば、まったくたちが悪い。

石の切り出しを途中でやめさせ、数を減らし買い上げるか。だとしても青木に渡した千両の半分を出してくれた者がいる。儲もうかるとど

ころか、手に入るのは大量の石だけだ。

「森田屋さん、弥市さん。石材は必ず不足する。そうしたら政府に売り付けてやればいい」

「久治郎さん、そんな鷹揚おうように構えている場合じゃねえよ」

森田屋が怒気を含ませた。

「その御三方おさんかた。大竹さまの話を聞かねえか」

重太郎の声が飛んできた。

二

九月に入り、ようやく高輪北にある兵部省の用地が引き渡され、即座に切り割りが再開された。連日連夜、八ツ山、そして御殿山から土を掘り出し、人夫も当初は千名であったが、御殿山も加わったことから、さらに千名を増やした。

「このまま年が明けちまったらどうなるかと思った」

久治郎がほっとしたようにいう。

横浜の嘉右衛門が秋までにはなんとかなるといっていたが、冬の前に再開したってことは、その読みが当たってたってことか、と弥市は苦にがく笑う。

「本当に始まるのはこれからだよ。石材の一件もなんとかしねえと

ならないし、どんな邪魔じやまがこれから入るかしれねえ。なにより海の
機嫌きげんがいいときじゃねえと進められないしな。一刻も無駄には出来
ねえ」

弥市は八ツ山から凧ないだ高輪の海を眺めながら力を込めてい
と、ふたりも大きく頷いた。

土は大八車たいはちぐるまに積んで海岸に運ばれる。築堤に渡るための道と資材
置き場を造るためだ。切り割りをしながら、海岸の埋め立ても同時
に進める。

渡り道は、場所によって長さが違うが、海岸から築堤の予定地ま
で遠いところで、約四十三間けん(約七十八メートル)、近いところでは
十間(約十八メートル)。工事中はむろんのこと、完成後に人が渡る
ための道であるため、蒸気車が走る築堤ほどに気を使わず出来る。
とはいえ、土台はしっかりと造る。

往還おうかんの土を舞い上げ、八ツ山から馬に引かせた車がひっきりなし
に走った。通りを歩く者たちがあからさまに口許に手を当てて、嫌
な顔をするが、致し方ない。

「土を入れるぞお」

人夫たちが、波打ち際なみに土を入れる。それを押し固めたら、礫れきを
上に敷き詰め、次に粘性ねんせいの強く硬質な土丹どたん(泥岩)を盛り土もどしてい
く。沼地の埋め立てもこれと同じで、築堤もほぼ同じ構造になる。

築堤の芯しんになるのは、土丹になるが、その上にやはり粘性のある赤土や沈泥ちんでいを盛る。粘性の強い土を主おもに使うのは、水の浸透しんとうが少ないからだ。

海上に出るのは、この盛り土の部分になる。

工事は、高輪大木戸おおきどを境にして品川までの南区域が先で、大木戸から芝までの北区域は、南区域の完成後に取り掛かる。

同時に、海の浚渫しゅんせつが行われた。浚渫にあたるのは黒鍬くろくわの者と弥市の常雇じょうぐいの者たちだ。舟を固定させ、海底の砂を浚あう。波が運んできた砂を取り払い海底を露出ろしゅつさせる。地盤が岩盤であればよし、しかし緩ゆるければ対策たいさくを施ほさねばならない。

浚渫で集められた砂は、護岸の工事や埋め立てなどでは乾かして使用することもあるが、築堤もちそのものには用もちいず、渡り道に使ってみてはどうかという話が出ている。

五日、十日が瞬またたく間に過ぎて行く。

弥市たちは、渡り道の途中で海を眺めていた。

「海の底がどうなっているかで工事の手間も変わる。海側斜面の石垣いの下は杭くを打ち土台木どだいぎを置いて頑丈がんじょうにするが、肝心なのは線路を置く盛り土部分だからな」

弥市が呟くと、

「柔やわいものだったらどうするんだ？」

久治郎が訊ねる。

「さらに杭を打ち込むか土台石を敷くかだな。そうならば、真鶴村に頼んだ石が使えるかもしれないが」

森田屋はそういつて唇を曲げた。石材の一件がまたぞろぶり返して来たのだ。あの寄合の後、真鶴村へはすぐさま使いを出した。青木丈左衛門は、話が違ふと怒り心頭であつたが、実は、石材を請け負つた横浜の者からも注文を受けていたらしい。

だからといつてそれで相殺出来るわけもなく、まずは横浜の請負人からの注文分を先に送るよう青木には頼んだ。

青木に渡した千両は、取り戻せないかもしれない。

「あの若造が、鉄道掛に伝えていればこんなややこしいことにはならなかつたはずだ」

森田屋は眉間に皺を寄せ、憤つた表情で吐き捨てた。

弥市も久治郎も気持ちちは同じだ。しかし、政府からの直請け負いの相模屋に逆らえば、外されることもある。自分たちだけなら意地も通せようが、人夫たち、さらに下請けの請負人まで仕事を失いかねない。ここは怒りを堪えて、飲み込むしかない。

それに、自分が引き入れた森田屋には申し訳ないが、弥市にとつて鉄道を敷くことは夢に見るまでに憧れていたものだ。ともかく、築堤を造り、蒸気車を通すことだ。

「仕事が終わったら、文句のひとつもいってやりやあいさ」

弥市は森田屋を宥めるように肩を叩いた。と、

「旦那方あ」

黒楸の源三郎が浚渫舟を離れ、漁師の舟に乗り換え、こちらにや

つて来た。

「明日には海の底が見られそうですぜ」

おお、と二人は思わず顔を見合わせた。嫌な気分がたちまち吹き

飛ぶ。

「そうか。ご苦労だったな」と久治郎が大声で答える。

「ならば、モレルさんに立ち会ってもらうことにしよう」

常吉、常吉はいるか？ と、弥市が首を回らして呼ぶ。

波打ち際で、人夫に指図していた常吉が飛んで来る。

「ひとつ走り築地の鉄道掛まで行って来てくれ。海底が覗いたから

モレルさんに見てもらいてえと」

はい、というが早いか常吉が駆け出して行った。

そういえばあの寄合以来、井上とは会っていない。切り割りが再

開したらすぐに顔を見せると思っていたのだが――。

翌日、干潮を狙って、海に入ったがそれでも膝まで海水が来る。

モレルは通詞とともにやってくると、底を確かめるように歩き、腰

を屈めて手で触れる。

弥市はモレルの足許を見ていた。これが武者満歌のいつていた長靴ながぐつというものか。藁沓わらぐつのような形だが、膝の高さまであるから、水が入らないのは確かにいい。草鞋わらじで海に入るのに比べれば、足の冷えも抑えられる。異人は便利なものを考えるものだと感じする。「岩のように固い。これならこのまま土を入れて締め固めても大丈夫でしょう」

モレルは通詞を介してそう告げると、にこりと笑みを浮かべた。大竹、重太郎、そして弥市あんどらも安堵する。

「それで、いつから土を入れられますか？ 一日どのくらい進められますか？」

通詞が早口にモレルの言葉を重太郎に伝える。

「波の堰せき止めをまず造るつもりでおりますが、品川まで三日でなんとかしましょう」

その答えに、森田屋が難色を示した。

「たった三日？ 南工区内のすべてをやるってことですかい？」

「人夫を二千も使えば、十二町（約一・三キロメートル）だつてあつという間に出来るだろうが。堰き止めを造ちまえばあとは土を入れて行くだけになる」

「そいつは無理だ。浚渫がすべて終わったわけじゃない。ここは比

較的、海岸に近く浅いほうだが、七十間（約百二十六メートル）以上離れているところになれば、もつと深くなる」

森田屋がいうと、

「おれに意見するのかい？ 石のことで大損したから、とさかに来てるのか知らねえが、じゃあ幾日あれば出来るといふんだい？ 大竹さまはどうです？」

大竹が腕を組み唸った。

「ここは森田屋のいう通りだ。浚渫が終わったところから徐々に堰き止めを造り、土を入れるのが賢明だな。海は風ばかりではない。

満潮時であれば仕事も滞る」

むつとする重太郎の顔色を見て、モレルが口を開いた。通詞がそれを訳す。

「私も少々言葉が足らず申し訳なかった。重太郎さんのいうようにまず堰き止めを造って困ってしまえば、作業は早く楽だろうが、それはあくまで陸でのこと。海であることを忘れてはなりません」

「モレルさんが謝るあやまることではありません」

と大竹が恐縮する。モレルが柔らかな笑みを浮かべた。

「正直、私も海の上に蒸気車を走らせることなど初めてのことで、まったくこの国の方々は突飛とつびなことを思いつくものだと思心しているくらいです。私もきつと海の上を走る蒸気車が見たくて、完成

が待ち遠しく、皆さんを急かしているのかもしれない」
すると、モレルが森田屋と弥市に顔を向けた。

「森田屋サン、平野屋サン」

かながわたいば 神奈川台場を造ったと聞いている。築堤もその工法を踏襲してほ
しいといった。

森田屋は、はっとした顔をしてモレルに頭を下げた。

「もったいねえお言葉です」

「日本の技術と異国の技術とが合わさって、築堤は出来る。頑張り
ましょう」

ものい 通詞の物言いにもなぜか力が籠っていた。

「では、浚渫が済んだところから順次、堰き止めを設置し、土を入
れて行くことにする。黒鍬の者たちはすべて浚渫に携わってもらい
たいのだが、安達屋、どうかな？」

「はい。そのように。堰き止めのための丁張りも一緒に任せましょ
う」

「うむ、それがいい」

大竹が頷く横で、重太郎は苛々と爪を噛んでいた。

と、モレルが突然大きなくさめをした。

皆が眼を丸くする。異人がくさめをすると顔を初めて見たから
だ。どことなくモレルが照れ臭そうにするのを見て、ぎすぎすした

空気が緩んだ。

「さあ、海からあがりましょう。身体が冷えちゃった」

久治郎がいった。

人夫たちはこれから冬に向かう海の中で作業を進めることになる。海面を越えて土を入れてしまえば、格段に楽になるが、波の堰き止め板もようを設けるのは海中での作業だ。干潮時の浅瀬あさせでも膝までは浸つかってしまう。

神奈川台場でも、海中作業には苦勞した。丁張りのための松丸太の杭を海底に打ち込み、石垣のための地杭じぐい、基礎その十露盤木の設置をした。けれど、神奈川は夏の起工であったため、むしろ暑さにやられたのだ。海面の照り返し、降り注ぐ強い陽射し、そして湿気しっけに体力を奪われた。肌はだが焼かれて眠れないとぼやく者が多かった。だが、こちらは冬の起工だ。

海に浸つかっていられるのはどれくらいか。こうして小半刻こはんとき、足を浸つけているだけでも、震えが走るのに。

渡り道を通り、街道に戻った時、一頭の馬が疾駆しっくしてくるのが見えた。

「なんだ、ずいぶん急いでいるな」

久治郎が眉をひそめたが、馬は弥市たちに向かって来る。

モレルも眼をばちくりさせている。よくよく見れば、手綱たづなを握とっ

ているのは井上だ。

「海の底を見たかったんだが。やれやれ、間に合わなかったか」

手綱を引いて馬を止めると、残念そうに馬上からいった。

井上を加えた八名は、街道沿いの蕎麦屋そばやに入った。すずぎをもらい足を洗ってから、小上こあがりに落ち着いた。モレルは物珍ものめずらしそうに店の中を見回す。やはり膝を折って座るのは苦手なようで、小上がりに腰掛けた。

「顔を出さず、すまなかった。あまりに鉄道のことにも夢中になりすぎていたもので、伊藤さんに叱しかられてしまったね。今、横須賀よこすかに製鉄所を造っているんだが、その視察に行っていたのだよ。だが、とうとう工部省が設けられる。僕は、そこに移ることになった」

おめでとうございます、と弥市と久治郎がいうと、井上は、むつと唇を曲げた。

「しかし、まだ鉄道専任ではなく鉱山も兼任のようだ。不服はいつてはいられないがね。ともかくこれで、大っぴらに築堤に顔を出せる。これも、モレルさんが工部省を作れと、伊藤さんに進言したおかげだよ。サンキュー」

モレルは感謝の言葉をかけられたが、何に感謝されているのか首を傾げ、曖昧な笑みを浮かべた。

で、海の底はどうだった、と井上は前のめりに訊ねてくる。

「頑丈なので、このまま土を入れるということになりました」

重太郎が答えると、井上は、そうかそうかと機嫌きげんよくいい、で、いつからかかるんだ？ と、さらに身を乗り出した。重太郎が唇を尖らせた。

「はあ、浚渫が終わり次第、順次堰き止めを設置し、土入れを行うこととなります」

大竹が重太郎をちらと窺いながら告げた。

「お、そういえば工事に加えた漁師たちはどうだ？」

「はい、舟を出してくれまますし、工事が進めば人夫としても働きたいといってくれています」

弥市が答える。

「漁師ならば、このあたりの海の様子もわかっているし、舟を漕げる者がいると助かるからな。ただ、これから先、ますます寒さが厳しくなる。海での作業については人夫たちのことを第一に考えてやってくれ。ともかく火を焚たいて、温めてやることだ」

弥市が「承知しました」と頭を下げる。

井上は下を向く重太郎を覗き込む。

「重太郎さんも、老練な請負人の間で色々と気苦労があると思うし、よく頑張ってくれています。頼みましたよ。親父さんはもちろん僕

も期待しています」

井上に言われ、重太郎は顔を少しだけ上げて、小さく返事をする
と再び俯いた。

「さて、海の底が見えた祝いだ。おい、酒だ、酒だ」

「井上さま、酔っ払って馬に乗ることになりますよ」

久治郎が窘めると、

「僕をなんだと思っている。呑乱だよ。まったく心配ない」

小女が運んで来た酒を、真っ先に取り上げた。

十月を迎え、通り道が完成すると、本格的に工事が始まった。

今度こそ、本当にいいよだ。

まずは基盤造りだ。約二間（約三・六メートル）の幅の基盤を造り、その上に盛り土をする。この基盤が堤の土台であるから、頑強なものにしなければならない。

すでに、汐留あたりの工事も進み、六郷川の橋梁にも取り掛かっているしおじめと聞く。この築堤の遅れは許されない。弥市は腹に力を込める。

堰き止め板は、斜めに積まれる石垣よりも内側に設置され、基盤を南の十二町造り終えてから、盛り土をし、石垣に取り掛かる段取りになっている。

海岸には、船で運ばれてきた石材、近隣から届いた木材が積まれていた。

石工たちが石を削る音、大工が丸太を切断する音、掛け声がひっきりなしに響いていた。八ツ山、御殿山の切り割りも続いている。山はどんだん土を掘られて、丘になりつつある。その土も掘ったそばから運ばれる。

「土を入れるぞ！」

源三郎が声を張る。

どさどさと海中に土が投入される。丁張りは、高輪大木戸あたりから、浚渫を終えた一町（約百九メートル）ほど先まで延びている。浚渫で取りきれなかった砂はさらに掘り、海底面を露出させている。土は次々と入れられ、海面を覆うまで積んでから、締め固める。人夫たちは海に浸かって、地盤を固めるたこを用い、土に落としていく。上から押し固めれば、その分、土の嵩が減る。またそこに土を入れ、締める。その繰り返しだ。

二千名の人夫が基盤造りに入っている。たことは取手が二本ないし四本ついた木製の槌のことだ。逆さにした蛸のような形をしているところからつけられたのであろう。

四本取手のたこをふたりに持ち、互いに合図を掛け合って落とす。その声と、土を叩く鈍い振動が、弥市たちがいる渡り道にも響い

てくる。

「おい、そのふたり。もう少し右を打て」

「お前たちはあつちだ。一ヶ所に固まらず、まんべん満遍なくやれ」

常吉と、重太郎の手代てだいが指図する。

この寒さの中でも人夫たちはすでに下帯したおび一丁だ。彫り物をした者は幾人もいるが、やはり、甚助じんすけの竜頭りゆうず観音かんのんは二千人の中にいても目立っていた。

それにしても、これを南北二十四町、続けるのか。渡り道から弥市は弧を描く海岸線を眺める。遠く、品川宿の茶屋が海沿いに軒を連ねているのが見える。途方もない時がかかる気がする。本当に完成するのかと不安がふと過ぎる。

いやいや、と弥市は首を横に振った。

こうした思いは、沼地の埋め立てでも、台場でも経験してきたことだ。始めは途方に暮れても必ず工事は終わる。

基盤造りは、思いの外ほか、順調に進んだが、人夫同士の喧嘩はしょっちゅう起きた。たいていは、たこを打つ場所を譲れ、譲らないのくだらないいざこざだ。

しかし、その日は、口喧嘩から、それを止めに入った奴まで、罵ののしられ、あつという間に数十人の取っ組み合いになった。

「おい、こら止めねえか」

常吉と、重太郎の手代が基盤に降りる。

「痛^{いて}えな。たこが足にかすつたぞ。おれの足を潰す気か！ 土を締めやがれ」

「てめえが近すぎるんだ」

「うるせえ、てめえも締め固めるぞ」

別のところでも始まった。

「おい、誰か止めてくれ」

弥市が叫んだ。

黒鍬の源三郎父子^{おやこ}、甚助らが中に飛び込んで怒声を上げる。源三郎の息子が取っ組み合う二人を引き剥^はがしにかかったが、頬^{ほお}を張られ、相手に掴みかかった。

森田屋や安達屋の手代たちも止めに入るが、力の強い人夫相手では敵^{かな}うはずもない。殴^{なぐ}られ、蹴^けられ散々^{さんざん}なことになった。

騒ぎは半刻ほども続いた。

怪我^{けが}をした者たちは、高輪北町の弥市の出張所に運ばれた。奉公人の中吉^{ちゅうきち}が慌てて医者呼びに行く。

大怪我をした者はいなかったが、人夫の中には、翌日、顔を腫^はらしている者が幾人もいた。

昨日、普請場^{ふしんば}を留守^{るす}にしていた重太郎が、それを眼にして、どういうことかと手代に詰め寄った。事の次第を告げる手代を重太郎が

叱り飛ばした。

「仕方ねえよ、許してやりな。人夫たちは気が荒い。それに下手すりや命を落とすことだつてあるんだぜ」

弥市が重太郎を宥めたが、

「こつちのことだ、放つておいてくれ」

と、がなり立てた。

ただ、昨日、中吉から話を聞いた。人夫のいがみ合いは、重太郎のところの者たちと、それ以外の人夫たちだという。

つまり、重太郎はこの築堤の差配を務めているから、自分たちの方が、格が上だという理屈らしい。

「とんでもねえ。心得違いだ。格が上も下もあるものか」

と、様子を見にきた久治郎がそれを聞いて呆れ返った。

湯屋でも、弥市や久治郎のところの人夫たちが二階で寛いでいると、重太郎の常雇いの者たちに難癖をつけられ、追い出されるといふのだ。飯屋でも同じようだという。酒を頼んでも、もう売り切れた、と亭主にいわせ、悔しげに店を出ていく人夫たちを眺めて、大笑いしているらしい。

「まったく、ガキみたいだな。大喧嘩して怪我人が出るよりはマシだが」

「でも、我慢も続きませんよ」

中吉が強い調子でいった。

三

築堤工事が始まってから、雨天以外に休みはなかった。

お蝶おちょうの元へ通うこともめつきり減った。

築堤工事のため、高輪北町に出張所を設けてから、宇田川町うだがわちようまで呑気のんきに通っていられなくなった。宇田川町の雑穀屋ざつこくやは今年の暮れに閉めるつもりだ。すでに、養母には出張所の取り締りを頼み、連絡役と雑用のため、奉公人の七五郎しちごろうと中吉を置き、七男の松之助まつのすけも一緒に暮らしている。お蝶にはそのところをよくよく言い含め、当座の暮らしのためだと銭ぜにを置こうとしたが、

「給金ぢゆうごんももらっているし、頂戴ちやうだいしていたお手当たも貯めていたから、当面は大丈夫」

と、押し返された。

素直にうけりゃいいものを、と弥市は鼻白みはなしろ、その夜は飯めしを食って高輪へ戻った。お蝶は何か言いたそうにしていたが、結局、弥市は何も聞かされることはなかった。

もうあいつも年増としまだからな。己おのれの身の振り方を考えなきゃいけないと思ひ始めたんだらうかな。

娘のお仲の縁談が決まった。四男の徳松が世話になっている外務省の役人の知り合いだ。話はとんとん拍子に進んで、十一月に祝言の運びになった。お仲が自分の縁談を姉のように慕うお蝶に話したのかもしれない。

おれみたいな爺といっても先は見えない。おれが逝っちまっても、お蝶の人生はそこからまだまだ長い。潮時だなあ。弥市は、苦笑した。

まだご一新前の慶応二年（一八六六）、横浜の大火で遊郭が燃えて、あげは、と名乗っていたお蝶を落籍した。もう四年だ。元々は長男の大太郎が死んで、それで半ば自棄になって揚がった岩亀楼の相手だった。名が弥市の好きな揚羽蝶と同じだったからだ。名は華やかでも、見た目は地味で、性格も朗らかにはほど遠い。けれど、なぜか一緒にいると心地よかった。常に荒っぽい奴らを差配しているからか、控えめで出しゃばらないところにはほっとしていたのだろう。女房の富は、店の奉公人や常雇いの人夫たちをてきぱき捌く女だ。お蝶といるときの方が、心が休まったといったら、富は怒るだろうなあ。なにより、お蝶は、おれの男を確認させてくれた女だ。だが、若い女を囲っていることを知っていて、好きにさせてくれていた女房にはやはり頭が下がる。

ともかく、お蝶の身の振り方を考えてやらなきやなるめえな――

さて、どうするか。

「おい、弥市さん」

森田屋に呼びかけられ、弥市は我に返った。相模屋の座敷だ。

「お、れ、が、これから先の段取りを確認しようっていうのによ。ちゃんと聞いてくれ。うたた寝かよ？ まったく歳は取りたくねえもんだ」

重太郎が絵図面に眼を落としながら皮肉を込める。

「相模屋さんよ、そういう物言いはねえんじゃねえのか？」

久治郎がぎろりと睨めつける。おれは築堤の差配なんだぞ、と重太郎が重々しくいう。

「まあまあ、あつしが悪かった、ちよいと考え事をしていたもので。

重太郎さん、申し訳ねえ。最初からお願いします」

弥市は頭を丁寧ていねいに下げる。

「考えるのは築堤のことだけにしてくれよ。いいか耳の穴かっぽじって聞いてくれよ。耳が遠いなら、でかい声で話すからよ」

「それには及ばねえ。耳も眼も達者たっしやだよ。心配してもらってありがたいえが」

久治郎が嫌みたらしくいうのを、森田屋がよせよせと眼くばせする。

ふんと重太郎が鼻を鳴らし、口を開いた。

「ここまでの進み具合を鑑みて、工事割付役の大竹さまと相談したんだが、南の高輪大木戸から品川は、来年の五月末、北の高輪大木戸から芝は再来年の正月明け。ちよいと余裕を持って、二月の竣工を目指す。肝に銘じてくれ」

あたりがざわつくのを見て、重太郎があからさまに不機嫌な表情を見せた。

「ちよっと待ってくれ。始まりがすでに遅れているんだ。ようやく基盤が出来たばかりじゃないか。土工は、土を盛ればいいだろうが、おれたちは違う。石を削って積むんだ。石だって全部が届いているわけじゃねえんだ。再来年の正月明けといたら、一年半もねえじやねえですか。大体南の堤が五月末なんてのは無茶もいいところだ」

土工の束ねが怒鳴るようにいった。

「待てよ。土工は土を盛ればいいってのは聞き捨てならねえなあ」
久治郎が腰を浮かせた。

「言葉の綾だ。本気でいったわけじゃねえですよ。ちっと頭に血が上って」

束ねはきまり悪い顔をした。

「五月末なら閏月を入れりゃ、九ヶ月ある。南約十二町、ひと月に一町半（約百六十メートル）をこなす計算だ」

重太郎が軽い口調でいった。

「そう容易たやすいものじゃねえ！ 海側の斜面には一尺しゃく(約三十センチメートル)四方しほうの細工さいくした石を十四段、陸側は、七から八段になる。それを両側十二町分だ。いいかえるなら、土工が遅れば、そのしわ寄せはおれたち石工の負担になる。かといって、土工が早く終われば、おれたちが焦あせらされる。はっきりいえば、竣工を延ばしてもらいてえんですよ」

だが、重太郎は引かなかった。

「鉄道敷設は、国の威信がかかっているんだ。遅れます、はい、さいですかっってお国が得心してくれるか？ 築堤はな、新橋から横浜までの敷設の一部だ。すべてが繋がらねえと蒸気車は通せねえ。築堤だけが遅れていいということじゃないんだよ。横浜や汐留の工事と照らし合わせて出したんだ」

大竹が隣で息を吐いた。

「石工の苦労もわかるが、竣工を変えるわけにはいかん。横浜は順調に進んでおるし、大きく遅れるだろうと予想されているのが、高輪の築堤と、用地買収がようやくなくなった品川から六郷川橋梁までの敷設だ。この予定もかなり譲歩したのだがな」

「ちよいとよろしいですかい」

と、嗶しゃがれ声が飛んだ。初めて寄合に参加した尾張屋嘉兵衛だ。

尾張屋だ、と皆がざわついた。

請負人として、江戸の頃、名を馳せた人物だ。歳は上だが、弥市の盟友でもある。幕府の作事方さくじかただった大竹も眼を瞞みはる。

「うちの若い者たちは汐留の建屋たてやで世話になっております。あつしは、平野屋さんからお声をかけていただきまして、老体に鞭打むちうって参りました。人夫の小屋などを造らせていただきます。まあ、それぞれの職人の苦労もありましょうが、まずは南の堤を造り上げることだけ考えてはいかがで？ 南が出来れば、北はその経験がいかせましょう。南の堤の竣工の期限を緩くするのも手かと思いますがね。人間、焦るとろくなことになりません」

なんたつて、あつしらが相手にするのは、海と天気でございますからなあ、人の力じゃどうにもなりやしません、と尾張屋は、はははと笑う。

むむ、と大竹が口をへの字に曲げた。

「これからさらに寒くなりましょう。ご承知の上で申し上げますが、海での作業は干潮のみ。昼夜分わかたずの作業となります。冬の間は、海に半刻も浸かったていられません。陸での工事とは異なる疲労が人夫たちにも溜たまっています。翻ひるがえって、北の堤は、夏から秋にかけてが海中作業。尾張屋さんのおっしゃる通り、南での経験もあり、進むのも早くなると思われれます」

「うむ」

と、大竹が頷いた。

「それでは、築堤竣工は再来年の正月明けは変えぬが、南は五月末をまずは目指していただきたい。鉄道掛にもそのように伝えることとする。それでよいか、皆の衆」

散会し、座敷を出る際、弥市は尾張屋を呼び止めた。

「かたじけのうございました。尾張屋さんのおかげでなんとかまとまりました」

「なんの。無理を通せば、どこかに歪みが出る。大きな普請になればなるほど職人同士がみ合っては進みが遅くなる。土工も石工も矜恃があるからなあ」

尾張屋が目尻の皺を深くする。

「ここだけの話、政次郎さんからも頼まれた。重太郎さんを守り立ててやってくれとな。養子とはいえ、可愛くて仕方がないのだろうよ。大仕事を任せたのもそのためだ。そうすりゃあ、自信もつくだろうってな」

はあ、と弥市は毒気を抜かれたような顔をした。

「おめえさん方みたいな老練な請負人を相手にするのは骨が折れるだろうからってな。侠客として人に恐れられたお人だが、息子には甘いに見える」

「いや、おれたちは重太郎さんを蔑ろにしようなんて気はさらさ

らねえですよ。むしろ頑張つてほしいと思つているのが本音で」
それじゃねえか、と尾張屋がいった。

「頑張れ、見てるぜつて気持ちがおめえさん方から洩れてい
るんだよ。若い者からしたら、嫌な気分だろうさ。気をつけな。虚勢を
張つてる重太郎さんも疲れていると思つて」

ま、人夫の小屋は任せときな、と尾張屋は弥市の肩をぽんと手で
叩くと、廊下を先に進んで行く。

「潮の香りが強え。こりゃあ、雨になるな」

堰き止めの板を巡らす手伝いをしていた漁師が浜に上がつて来
るなりいった。

「ちよいと雲はあるが、晴れているじゃねえか」

弥市が返した。

海岸にいるのだから潮の香りはしじゅうしている。香りの強さな
どどう嗅ぎ分けているのかはわからないが、漁に出ている者のいう
ことだ。本当だろう。

それが聞こえたのか、重太郎が、

「今夜は干潮だぞ。基盤を続ける」

そういった。

「けどね、重太郎さん、漁師がこういつているんだ。おれたちでは

気づかねえ匂いなんだろうよ。大事をとって休みにしましうや」
差配はおれだよ、と重太郎は弥市を睨めつけると、堤の上にいる
手代のほうへ歩いて行つた。

夕刻になつて、わずかに雨が降り始めた。やはり今夜は無理だ。
降り続ければ明日も休みだと弥市は常吉に言い置いて、堤を後にし
た。

久しぶりにお蝶の顔でも見に行くか、と宇田川町へと向かう。

「いらつしやい、お久しぶりで」と、お蝶は少しばかりぎこちない
笑みを浮かべて弥市を迎えた。

飯の支度したくをしていたが、小袖こそでもござっぱりしたものを着て、化粧けしよう
もしていた。

「なんだ、仕事を見つけたのか？」

弥市は長火鉢ながひばちの前に腰を下ろして、煙管キセルを取り出した。

ううん、とお蝶が首を振る。なんだか様子がおかしい。

雨足が強くなる。やはり休みだ。弥市はゴロリと横になり、
「久しぶりに泊まっていくかな」

勝手にいるお蝶に聞こえるよう、声を張る。

お蝶が慌てて顔を見せると、「あのね、今夜は」と口籠くちかごる。

と、戸を叩く音と同時に男の声がした。お蝶がうろたえる。

弥市は息を吐いた。男か——。そんならそうとはつきりいえないものを。

「あのね、違うの、弥市さん」

「いいんだ、いいんだ。男が出来たら、それはそれでめでてえことだ。おれは勝手口から出て行くよ。ほら、早く出てやりな。雨に濡れて来たんだろうからな」

弥市は勝手口の戸を引いた。

男の低い声でした。若そうだ。お蝶が手拭いを取りに来たが、弥市にペこりと会釈をして、すぐさまとって返した。弥市は表に出たが、傘を借りるべきだったと悔やんだ。雨が激しくなっている。なんとも他人行儀な頭の下げ方しやがって、と弥市はぼそりと呟いた。やれやれ、濡れ鼠を拾ってくれるのは、芝田町の女房どのだな。飛沫を上げて、雨の中を走った。

女房の富と顔を合わせるのも久しぶりだったが、ずぶ濡れの弥市を見て、

「あれまあ、井戸の底から上がって来たようだ」と、大笑いした。

自分の家にいるのに居心地が悪いというわけではないが、さすがに妾に振られたと富にはいえない。飯の支度をしていて、しかも化粧までしていた。なぜ、気づかなかったのかと、惨めな気分になっ

た。

まあ、男が出来たなら、おれがしやしり出て世話をすることはねえ。ついこの間、潮時だと思っていたのだ。まったくどうにも男つてのは諦めが悪いもんだ。いつまでも女が自分を想ってくれていゝるなんて、調子に乗って。女は先を見てるんだ。

夜具やぐに入ったが、雨音がひどくなかなか寝つかれなかった。築堤のことが心配になる。

波の堰き止めの板は渡してあるから、基盤は大丈夫だろうと思っても、やはり気がかりだった。見にいったところで、何が出来るはずもない。おれたち土工が相手にしているのは、大地であり、水であり、天気なのだ。人の知恵が及ぶものじゃない。

やはり胸底むなぞこがざわつく。

弥市は夜具を抜け、着替えた。

笠と蓑みのをつけ、籠灯がんどうを手にした。

その物音が聞こえたのか、富が起き出して来た。手燭てじよくの明かりに照らされた弥市の姿を見て、眼を丸くした。

「ちよいと、こんな雨の中、どこ行くのさ」

「高輪に戻る」

「堤を見に行くんじゃないよね」

「ああ、明日早くに、久治郎さんが来ることを思い出してな」

口から出まかせをいって、潜り戸を開け、弥市は表通りに出た。途端に打ちつけてくる雨に身が竦む。すぐに足許が濡れた。龕灯の明かりが暗闇の中、ゆらゆら揺れた。身を叩く雨を鬱陶しく思いながら、進む。やはり胸が騒ぐ。何事もなければいいが。

遠くに明かりが見えた。あれは、篝火か。

馬鹿な。重太郎は仕事をやらせたのか！

弥市は駆け出した。汗が噴き出す。膝ががくがくする。雨に混じって、声が聞こえた。怒声か、いや悲鳴のようにも聞こえた。

さらに幾人もが叫び声を上げている。

「おれだあ、平野屋だ。何があつたんだ」

弥市は渡り道を行き、堤を駆け上がった。人夫たちが波を被りながら、海に浮いていた。

「どうした」

ひとりの人夫の腕を掴んだ。

「急に高波が押し寄せて来て、舟に乗っていた奴らが四人、舟ごとさらわれた」

口許を震わせながら、いった。海に入っているのは、流された者を探していたのか。

「重太郎さんはどこだ」

重太郎は、人夫に守られながら、呆然ぼうぜんとしている。弥市は重太郎に近づき、胸ぐらを掴み上げた。

「雨になるといったろう。なぜ仕事させたんだ」

重太郎がはつとして弥市の手を振り払う。

「石工もあんたらも弱気なこといつてるから、おれが進めてやろうと思っただ。遅れたら誰のせいになると思っているんだよ！」

「人夫を危険にさらすな」

「旦那方」

人夫のひとりが止めに入ってきた。弥市は首を回らし、海に向かって叫んだ。

「海から上がれ、早く上がるんだ！」

と、暗い海から、人夫をひとり背負った者が上がって来た。

「時蔵ときぞうさん！」

手代と人夫たちが走り寄る。

「こいつだけ見つけた」

時蔵という人夫は、盛り土まで上がって来ると、仰向けあおむに転ころがった。

四人のうち、ひとり時は時蔵に救われたが、翌日、浜にふたりが打ち上げられ、ひとりはどうとう見つけられなかった。

大竹が、重太郎に怒声を浴びせた。

「死んだ奴の家族には、うちで十分な金を渡します。それでいいでしょう」

重太郎は、ふいと大竹に背を向けた。

「貴様！」

久治郎が慌てて大竹を止める。大竹は怒りの矛先を人夫たちに向けた。

「何がなんでも死ぬんじゃないぞ」

重太郎はあれ以来、めっきり口を利かなくなった。指図はすべて手代に任せている。

高輪の弥市の元に、重太郎の手代が訪ねてきた。

「過日の人死にのことですが。若旦那に代わって、お詫び申し上げます」

手代はいきなり三和土で土下座した。

「若旦那には口止めされておりましたが、実は波の堰き止め板の補強のために海に出たんです」

え？ 弥市は耳を疑った。

「大旦那の手前じゃありません。若旦那は本気で、築堤を造りたいんです。蒸気車のことだって、鉄道掛から色々聞いて、ちよいと子どものようにはいしゃいでたんです」

あの重太郎が、と弥市は眼をしばたたく。

「平野屋さんや安達屋さん、森田屋さんには敵わないが、自分なりに差配を務めるのだと」

手代は次第に嗚咽おえつを洩らし始めた。

「ちよつとばかり気難し屋で意地っ張りですが、気持ちはずきつと皆さんと一緒になんです」

弥市は、三和土に降りて、手代の背をさする。

「このことは重太郎さんに内緒にしておくよ」

手代は、涙と涙はなでぐしゃぐしゃになった顔を上げた。

「かたじけのうございませう、かたじけのうございませう」

弥市が止めるまで、いい続けた。

人死にが出たことで、無理はしないことにはなったが、そんな弥

市たちを嘲笑あざわらうように海は気まぐれに襲おそい掛かってくる。

ますます困難きわを極め、海は生き物だと弥市は思った。波除なみよけをし

ても、基盤にまであつという間に襲い掛かってくる。干潮ばかりで

ははかが行かないと、満潮時にも、基盤造りを続けたが、土を懸命

に締めても、翌日には緩くなっていることが度々たびたびあつた。

その度に土を盛り、締め直す。いつまで経っても終わりが見えな

い。

堰き止めの板をいくら直しても、崩れてくる。小さな波あなどと侮あなどつていると、本当に足許をすくわれる。

幾人もが、海に持っていかれ、それを助けに舟を出す。引き潮でとんでもなく流される人夫もいた。二千もの人夫すべてに目を配るのは無理だ。

徒労感が皆を襲う。十二町の長さは、先の見えない遙かに続く道に思える。

人夫小屋でも小競り合いがすぐに始まる。

皆の心はばらばらだった。

十一月。娘のお仲が祝言を挙げた。弥市は築堤の工事の進みが悪く、あまり気乗りがしなかったが、それでも、角隠しをつけた花嫁姿を見たときはうっかり目頭を熱くした。

お仲はお蝶を祝言に呼んでいた。お蝶は赤い小袖を着て、お仲を眩しげに眺めている。

尾張屋嘉兵衛が、高砂を唸り、宴は賑やかに華やかに進んだ。

隣に座っていた富が、弥市を肘で小突いた。弥市が訝ると、

「お前さんが世話をしていたの、あの娘よね」
富がしれつといった。口に含んだ酒を思わず吹き出す。

「ああ、もう。一張羅が汚れちまうじゃないの。お仲が姉様のようだって。まったく、自分の妾を娘と一緒に働かせるんじゃないわよ。呆れたわ」

一言もなかった。ただ、言われるがまま弥市は気を取り直し、酒を口に運ぶ。

「で、あたしがね、茶店を出したらって勧めたのよ」

は？ 弥市は女房の顔をまじまじと見つめた。だが、富は眼を合わせず、膳ぜんの料理を食べながら、話し続けた。

「お前さんといったって、先があるわけじゃないでしょ。せっかくの花の頃を隠居間近の人といることはないって、そうよくよく言い含めてね」

それで、品川あたりに茶店を出せば、蒸気車の停車場も出来るから賑やかになるし、いいんじゃないか、としもた屋を探してくれる男ひとを仲立ちしたと、富は淡々たんたんと話した。

あの夜、お蝶の家に来たのは、その男だったのか。

「ごめんね。お前さんに内緒で余計な真似しちゃってさ。お仲に頼まれたもんだから」

くすくす、と富は笑った。

お仲にも気づかれていたのか？ それともお蝶が話したのか？

いずれにせよ、どうでもいい。女三人の中で、おれは蚊帳かやの外だったというわけか。

ははは、女はたいしたものだ。

「ちゃんと鉄路を通しなさいよ。品川が賑わえば、お蝶ちゃんも

安泰よ」
あんたい

お蝶が弥市をそと窺ってきた。弥市は、大きく頷いた。
停車場が出来れば、きつと品川もさらに人が増える。

お蝶のためとはいえないが、腐くさっている場合じゃねえな。

さらに寒さが増し、海は凍こえるように冷たい。あちらこちらに火を焚くいて、人夫たちがすぐに身を温められるようにする。飯にも温かな味噌汁みそじゆをつけた。飯炊きだけでは賄まかえないため、高輪の飯屋にも協力させた。二千人の飯だ。銭がたんまり落ちる。そうして工事の恩恵あずかに与る店を苦々しく思う同業者もいて、敷設反対を声高に叫ぶ者がまたぞろ出始めた。

そのせいで、夜も見廻りが必要になった。塵ごみなどを大量に投げ捨てに来るからだ。

基盤の上にそんなものを撒まかれてはたまったものじゃない。

人夫の気力は失われ、反対派がうるさくなり、どうにも八方塞はっっぽうふさがりの様相ようそうだ。

久治郎は、築堤を離れて、八ツ山下の木製橋の架設に取り掛かっていた。八ツ山下と品川口を繋ぐ橋で、この橋の下を蒸気車が通る。跨線橋こせんきょうと呼ばれるものだ。

弥市は橋台の石を受け持った。

やはり久治郎がいないと、なんとなく寂しさがある。

まあ、架橋すればすぐこちらに戻る。

それまでに、どのくらい進められるか。基盤はまだ三分しか出来ていない。それも、波を被れば、また締め直す。その繰り返し皆の気力を削ぐ。

海風が身にしみた。

海鳥の鳴き声ももの悲しく弥市の耳に響いた。

年も押し迫った頃、基盤の作業を眺めていた重太郎が眉間に皺を寄せて立っていた。腕を組み、じっと何かを考えている。人夫が死んでから、重太郎の顔つきが変わったように思えた。拗ねたような利かん坊のようなものが消えていた。

「なあ、平野屋さん」

弥市はいきなり名を呼ばれ、驚いて重太郎に顔を向けた。

「基盤を固めたら、海側に砂利を積んだらどうだろうか」

「基盤を品川まで通してから、盛り土と石垣を両側に同時に造るって段取りを変えるつもりですかい？ 大竹さまがお決めになったことですね」

訝る弥市に重太郎はいった。

「陸側は後でもいい。けど海側は常に波が打ちつけてくる。堰き止め板を巡らしたところで、大波がきたらひとたまりもねえ。それに

基盤はずっと水に浸かっているままだ」

打ち寄せる波は静かでも、砂を運び、海岸の岩も侵食するほどの力がある。それは、これまでの作業でも痛いほどわかっていた。

「要は、丸太と板だけじゃ心許ねえということだ。基盤の内側に浸水して崩れるのがいっち怖え。だったら、基盤がある程度進んだところで、海側に盛り土をして、石垣の裏込め石を積んじまうんだ。なるべく基盤に水を寄せ付けたくねえ。砂利を置いておけば、基盤に直には当たらない。砂利は水を溜め込まないからな。水が寄せてきても、砂利で水は抜けていく。石垣を積んでも、それを残せば、基盤や盛り土は海水から守れる。それから、裏込め石を積んだ先に杭を打つ。波除け杭だ。その先には雑石を撒く。確か、品川台場でも海中に石を撒いて、波を弱くしたんだろう？」

「ああ、そうだな、それはいい」

弥市はそう返したものの、大竹は土と石の作業を分けた方が効率がいいだろうといていた。が——陸ならばどんなやり方も出来るのだ。だが、海相手では何が起きるかわからない。万全を期しても、思わぬことが起きることもある。人死にが現に出ているのだ。

「重太郎さん。石工の請負人にその旨を告げましょう。砂利もかなり届いているようですが。やはり何より基盤を波から守ることが大事だ」

ああ、と重太郎は低く答えた。

「あと、真鶴村の四万本の石は石垣の先に止め石のように置くのはどうだろうか。石垣の石は一尺四方。真鶴村に頼んだのは一尺四方、長さ三尺（約九十センチメートル）だったな」

「それはありがたい。すぐ真鶴の者に知らせましょう」

重太郎が伺いを立ててくるのが意外な気がした。今までならば、誰にも伺いを立てず勝手に事を始めていただろうに。人夫を亡くしたことが、差配として自らが背負った責任を強く感じ取ったのだと、弥市には思えた。

「じゃあ、頼んだぜ」

重太郎が身を翻した。

弥市は大竹を説得し、工部省に赴き、モレルにも話をし、許可を得た。森田屋は真鶴の青木ふみに文を出す。

これで千両の損はまぬかれそうだと、森田屋が、ほっとした顔をする。

早速、重太郎がいった通り、基盤の上に沈泥（粘性土）などの土を盛り、締め固め、次に土丹の小石や礫を積み上げた。

これはそのまま石垣の裏込め石となるため、しっかりと固める。

それにより、堰き止め板を外して、海中に径五寸わたり（約十五センチメートル）ほどの太さの杭を一定の間隔かんかくをもって、打ち込む。舟に雑

石を山と積んで海に撒き散らした。

それによって、基盤への浸水がかなり軽減されることになった。

モレルもこれには大いに満足していた。

こんな方法があつたのかと、重太郎の手を握り締めた。

以来、モレルは通訳を連れ、しばしば普請場に顔を出した。

「モレルさん、駄目だよそれじゃ。それじゃ土が締まらねえよ」

モレルがたこを打ちつけたというので、ひとりの人夫と組ませたが、どうにも調子が合わないらしい。相方になった人夫は身振り手振りで、たこの打ちつけ方を教える。

それでもぎこちない動きをするモレルに、業を煮やした人夫たちが集まり、とうとう手取り足取りやり始めた。

うまく垂直に落ちた時には、歓声かんせいが上がった。

「あはは、モレルさんもやはり現場がいいんだなあ」

いつの間にか井上が隣に立っていた。

モレルはたこを打つのが気に入ったのか、「ほしい」とまでいい出した。

「築堤が竣工したら、差し上げますよ」

弥市がいうと心の底から嬉しそうな顔をした。

モレルの興味は、波除け杭にも及び、舟に乗って、木槌きしちを振るう様を眺め、拍手を送ったり、井上ともっこを担ぎ、ふたりに足を震

わせ、皆を笑わせた。

普請場に笑い声が響く。

弥市も一緒になって笑う。

「やれやれ、皆、本当にご苦労」

井上が大声を出した。二千人の人夫、石工たちも一斉に呼応する。

「六郷川の橋梁も工事は順調に進んでいる。来年の二月からは横浜停車場の本屋普請が始まる。確実に前進している。築堤も必ず完成する。皆の努力は必ず報われる。さあ、今日はもう仕事を終えて、飯にしよう、酒を呑もう」

弥市は井上の言葉に呆れ返った。まったく、憎めないお人だ。

後日、モレルは、通船口の石垣について提案があると、高輪の出張所を訪れ、井上、大竹、重太郎ら主だった者と、石工の束ね、源三郎、甚助、時蔵らも顔を揃えた。

海側の傾斜面の石垣は、石が横に並ぶ布積みだ。陸側は斜めに積む、谷積みだ。これら石垣は、日本の築城技術を踏襲している。

だが、モレルは、通船口の部分の石垣は、西洋技術を用いてはどうかというのだ。

西洋は昔から石造りの建屋が多く、門などの弧も石を用いて造る。堤と堤の間に橋を渡すのであるから、橋の下の石垣は堅牢でなければならぬという。もちろん、日本の石垣も強度はあるが、モレル

が口にしたのは、石ではなく煉瓦れんがと呼ばれる資材だった。

「布積みに似ておりますが、西洋の煉瓦造りのように、長い石を横に並べ、次の段は少し短めの石を並べ、その上はまた長い石と、交互に積んでいきます。この積み方はかなり強度があり、資材の節約にもなります」

ただし、とモレルが顎鬚あごひげを撫なでて、険けわしい表情を見せたが、ややあつて、言葉が続けた。

「石の加工が大変です。六面すべての表面をつるつるに磨みがき上げていただきたい。真まっ直すぐに、まるで刀ですっぱり切ったように。石と石の間に隙間を作らないためです。石と石を接着するために、漆しつ喰くいを塗ぬり、石を積み重ねます」

いかがでしょう、とモレルは石工の束ねを見据みすえる。

「面白おもしろえ。やってみましょう」

束ねはどんと胸を叩いた。

「頼たのましい。では今度は僕から」

井上が、信号機を設置するという。

「信号機ってのはなんですかい？」

弥市が訊ねると、井上が、蒸気車に合図を送るものだといった。築堤の中でも一番弧を描いているところに置くのだという。

「これは、石積みで頼むよ。絵図面は後で見せる。ところで——反

対の者たちは少しなりをひそめているかい？」

夜廻りを続けているので、あからさまな妨害はないと、弥市は答えた。だが、通りすがりに文句をいう、小石を投げつけてくるなどの小さな嫌がらせは今もある。

明治四年（一八七一）を迎え、石垣に取り掛かる。

石垣の底には、胴木を渡し、留杭を打ち込み、その上に石を積み上げる。三尺四方に揃えられた石の重さは、十八貫（約六十七・五キログラム）ほどだが、黒鍬の者たちは、ひよいと持ち上げ、積み上げる。

「まったくたいした奴らだねえ」

森田屋が感心した。

モレルが今日もやって来た。石工の削った石に歓声を上げていた。通船口に積む石を眼にしたようだ。

「これほどまでとは。たいしたものです」

モレルは見事に削られた石の表面を愛おしげに眺めた。

漆喰を塗り、石を積む。

「まるで、煉瓦のようだ。でもこちらの方が美しい」

モレルは感嘆した。

出来上がった西洋風の石垣を久治郎がいつまでも眺めていた。

この年、当初の目標通り五月に南の築堤が完成した。

人夫、石工はこれまでの苦勞を忘れたように、いつまでも雄叫びおたけを上げた。あとは固く締め固めた天端の上に、道床を敷き詰め、枕木と線路を置くだけだ。線路敷設はモレルではなく、別のお雇い外国人が指導した。

弥市の常雇いの人夫を出したが、

「小馬鹿こばかにしてくるんでき。物差しでおれたちを叩いて来やがるんです。しかも、いつも酔っ払っていて、やっつけられねえですよ」

モレルとはまったく違々と連日文句を垂たれた。

弥市は、モレルの方が実は変わっているのかもしれないと、笑い飛ばした。

まだ誰もいない早朝、弥市はひとり、線路を歩いた。

鉄の線路に触れると、ひんやりとした。

ここを蒸気車が走るのだ。

夢が現うつとなる時が近づいていると強く感じた。築堤から眺めた海はどこまでも大きく、広がっていた。

四

南工区の完成を喜んでいる暇ひまもなく、芝から高輪大木戸までの北工区の浚渫がすぐさま開始された。すでに半分、南を完成させたと

いう自信が余裕にもなり、工事は順調に進む。夏の終わりを迎え、基盤造りが始まると、モレルはたこを打ちに三日にあげず普請場を訪れた。

人夫たちは「モレルさん」と気軽に声掛けをする。モレルも嬉しそうにたこやもつこを担いでいる。モレルがいると、皆が不思議と笑顔になる。いざこざも喧嘩もめつきり減った。

「皆デ、一緒ニ、タコ打ちマショウ」

重太郎の表情も柔らかくなっていった。意固地な態度も見せない。あと半分。

が、そのモレルが秋になり姿を見せなくなった。井上は相変わらず手伝いに来て、皆を鼓舞しているが、心なしか消沈しているように見えた。

大阪、神戸でも工事が始まり、多忙を極めている。

その疲れのせいだろうと思ったが、弥市が助言などおこがましい。気にはなったが、井上が話してくれるまで待つしかなかった。

八ツ山下と品川口を繋ぐ跨線橋を仕上げた久治郎が戻って来た。

雨天で休みとなった日、久治郎に飯屋に誘われた。

久治郎は、膳を横にずらすと、いきなり頭を下げた。

「なんだよ。どうしたんだよ」

久治郎は工部省に入り、開拓使として東京を離れ、北海道へ行く

という。

弥市は言葉を失った。

「今、肥後^{ひご}さまも工部省におられる。おれは、工部省で横浜と汐留の停車場の絵図面を見せられた。亜米利加^{アメリカ}人が引いたものだ。請負人を長く続けて来たが、その絵図面を見た時、大工の血が騒いだ。こんな建屋を造りてえと思った。西洋と日本とが合わさった屋敷を建てたいと。今更、この歳で宮仕え^{みやづか}なんざ、と思ったが、工部省でおれの思いが活かせるなら、やってみたいと思ったんだ」

久治郎はそういって、再び頭を下げた。

「いつ、いつ発^たつんだ？」

「今年中には」

「そうか。それなら、あらためて宴を開かねえとな」

その日、ともに呑んだ酒は苦かった。

小糠^{こぬか}雨^{あめ}の中を、芝田町の自宅へと歩いた。

気が抜けたというのとも違う。この一年以上、鉄道敷設に懸命になつて来た。だが、久治郎は蒸気車に特別な思いを抱^{いだ}いていなかったのかもしれない。大きな仕事とだけ捉^{とら}えていたのかと思うと落胆^{らくたん}した。その方が近い。しかし、落胆したのも、気が抜けたのもおれの傲慢^{ごうまん}さが思わせているだけのことだ。久治郎には久治郎のやりた^いことがあるのだ。

そうはいっても物寂しものさびさは募つった。

九月になり、北工区の堤の一部で石垣積みが始まった。このままいけば、来年の正月明け、遅くとも二月には竣工を迎えられそうだと、皆が最後の力を振り絞しぼった。

しかし、その勢いを削ぐように、悪い知らせが届いた。

「モレルさんが、亡くなった」

井上が顔色をなくしていた。モレルは二ヶ月前に体調を崩し、横浜居留地きよりゆうちで療養りようようしていた。少し回復したら印度インドに渡り、そこで病を治し再び日本に戻るはずだったという。

井上が消沈していたのは、やはりモレルの病のせいだったのだ。「日本初の鉄道だけではありません。海の上を走る蒸気車は世界でも初めてです。日本と英吉利の技術の結晶を見たいです」

そういつて笑ったという。

かなり具合が悪そうだと見る目にも明らかではあったが、井上は誰よりモレルの快癒かいゆを願っていた。病は労咳ろうがいだ。

だが、横浜での療養を始めてわずか二ヶ月後の明治四年九月二十三日。モレルは帰らぬ人となり、さらに夫人もその後を追うように、翌日に亡くなった。

夫人とともに横浜山手にある外国人墓地に埋葬まいざうされた。

外国人居留地の英国軍人や、井上ら鉄道寮の者が葬儀に参列した。

日本初の鉄道敷設に携わる技師長として真摯しんしに誠実にその役目を十分に果たしたが、鉄道開業を見ることなく旅立った。

葬儀の後、モレルを偲しのぶため、工事は一日休みになった。完成した南の築堤の上に請負人が集まった。が、人夫たちもわらわらとその場にやって来た。ともに汗を流したモレルを皆が慕っていたのだ。「モレルさんはまことに忠実な方だった。工部省を作るよう進言し、技術者を育てることに熱心だった。いずれ日本人は外国の力を借りずに鉄道を敷設出来るようにならなければといつも熱く語っていたよ。枕木が木製になったのもね、日本国内の産業を伸ばすべきだと、外貨を節約して、国産の品を使うべきだと僕にうるさくいうんだ。技術を授けにきたばかりでなく、日本のことを心から思っただけに、実に励んでくれた。悔しいよ」

井上は首を横に振った。

「悔しいのはモレルさんのほうだ。もうすぐ、もうすぐだったのに」
な

盃さかずきに眼を落とす。

「川崎から横浜まで蒸気車の試運転が始まりました。けどね、これは皮肉なのかい？ それとも天の思おぼし召めしかい？」

僕たちは、モレルさんの葬儀に参列するため、川崎から横浜まで蒸気車に乗ったのだよ、と言葉を詰すまらせた。噎すり泣きが人夫たち

の間から洩れ聞こえてくる。

「献杯！」

井上はこぼれ落ちそうになる涙を隠すためか、上を見上げて、盃を高く掲げて呑み干した。高輪の海は集まった皆の心を映すように、静かな細波を立てていた。

「よーいせ、よーいせ」

人夫たちが、威勢のよい掛け声とともに、一斉にたこを落とす。「ほらあ、おめえらもたもたすんな。こつちだ、こつちに土を入れる」

甚助と時蔵のふたりがもっこを担ぎながら、他の人夫たちに指図する。

海を渡る風が身を切るように冷たくなった。海の色も空の色を映して鈍色に近い。白い波頭を見せながら打ち寄せる音が、人夫たちの声が、高輪の海から高みに上がっていく。築堤工事が始まって二度目の冬だ。しかし人夫たちは、すでに下帯一丁に、足許は草鞋か裸足だ。二千人の人夫が、きびきびと働いている。土や砂利を運び、たこを落とし、その動きに無駄がない。そこらで休んで煙草を飲んでいる者の姿もない。少し前なら仕事中に仮小屋に集まって賭け事に興じたり、隠れて酒を呑んだりということもあった。だが、この

ひと月、まったくない。

弥市は常吉とともに渡り道から、盛り土の上立って、その様子を眺めていた。すでに出来上がった南の築堤には線路が敷かれていた。

常吉が首を傾げた。

「一体、どうしちゃまったんですかね、工事の進みもいいし、なにやり人夫の仲がいいんですよ。特に甚助と時蔵なんか、連れ立って湯屋に行くってんですから」

「いいことじゃねえか。そういうおめえだって、重太郎さんこの手代とよく飯を食ってるだろう？」

「そりゃあ、一年以上も一緒にいれば気心も知れますよう」

と、そこに件くだんの手代がやって来た。

「常吉さん、あつちで砂利を積んでた人夫が数人、海に落ちちまつた」

「お！ そりゃあ大変だ。旦那さま、行ってきます」

おう、と弥市が答える前に常吉は盛り土の上を走っていった。

そうか、モレルさんだ。と弥市は思った。

モレルの無念が、人夫たちにも伝わっているのだ。

遠い異国から来て、日本に鉄道を敷設するために尽力した。持っている知識を分け隔へだてなく授けた。いばることなく、穏やかに、だが情

熱を覗かせながら。そして謙虚で、人夫や石工の技術に大袈裟おおげさなくらい感動していた。皆、それだけでも感激したろう。

モレルは人夫同士の喧嘩に割って入り、「二緒、仲良ク」と口癖くちくせのように片言の日本語でいつていた。

北工区にも通船口が出来る。石工たちは、石をきれいに削り上げる。モレルがその技術に感動をあらわにしていたのを思い出す。

皆が心をひとつにしている。

あらためて、モレルに感謝した。

弥市は、モレルが眠る横浜の方角に向けて、頭を深々と下げた。

明治五年（一八七二）の年が明けた。

職人、人夫たちとともに、高輪大木戸の渡り道を通り、築堤に上がり初日はつひを拝んだ。

遠い水平線が、朱あかく染まり始め、陽が頭を覗かせたときに、柏手かしわでを打った。空は乳白色にゆうはくしよくに変わり、海は朝日に照らされ、光の道を作る。

大竹が年頭の挨拶あいさつをし、二日が初仕事になった。晴天が続き、工事は着々と進んだ。

芝から高輪大木戸の北工区の完成が見えてきた。

通船口に架橋し、あとは傾斜の石垣を一町ほど残すだけとなった。

人夫たちと石工たちの顔にも安堵の色が浮かんでいた。

一年半近くに亘った大工事が、まもなく終わる。弥市はむろんのこと、誰もが満足を得ている。

重太郎が人夫の小屋を回り、酒と肴を振る舞いこれまでを労う。弥市と、尾張屋、森田屋も同行した。人夫たちや石工ら職人たちは、振る舞い酒に酔いながら、浮かれる。歌をうたう者、踊り出す者、手拍子で盛り上げる者。請負人が誰かなど、そんな垣根はとうに取り払われた。大仕事を成し遂げた仲間。日本初の鉄道、しかも海の上を走る築堤を造り上げるといふその歓喜が伝わってくる。

築堤を完成させる、それだけじゃないのだと弥市は思った。ひとつの仕事に、皆が心を同じくし、その誇りをもって成し遂げることの尊さをあらためて知った。

築堤を造った者たちの名前など、後世に残るわけではない。

しかし、この二十四町の堤を眺めれば、蒸気車が走る姿を見れば、造った人夫、職人らの意地と矜持が自ずとわかるだろう。

「あまり呑みすぎるなよ。明日は休みにしたが、はめを外すんじゃないぞ」

重太郎が人夫らをたしなめる。が、その物言いには厳しさも嫌味たらしきもない。

険のあった顔が穏やかになり、厳しい言葉を放つても、そこには

人夫たちを思う気持ちが入められるようになった。

たぶん、もう大丈夫だと弥市は思った。

築堤の完成を見て、おれは北海道に行く。函館はこだてから札幌さっぽろまでの道を通すのだ。

昨年、工部省の肥後から声を掛けられたのだ。

弥市はむろん、断った。築堤の完成を見るまでは離れないと突っぱねた。だが、肥後は竣工を迎えてからでよいという。

弥市は揺れた。蒸気車が走る姿を見るのが、本当の完成じゃないかと思っていた。

それを森田屋にいうと、あっさり行けばいいと答えた。

「久治郎さんも北海道に行っちゃったし、寂しいけどな。築堤が完成するまでで十分じゃないか？ あんたは鉄路を見事に拓ひらいた。それで十分だよ。この鉄路が日本中に延びていくんだろう？ それに、あんたは必要とされているんだぜ。それを断ることはねえよ。おれが蒸気車をたっぷり見てやるから、安心しなよ」

そうはいわれても、迷った。

迷ったが、決めた。鉄路はずっと延びていく。その最初をおれは敷いたのだ。おれは望みを叶えたのだ。井上は残念がったが、工部省の仲間になるなら、行ってくださいと背を押してくれた。

「差配さんもこっちで一緒に呑もうぜ」

時蔵が重太郎を手招く。

「いや、おれはまだ、他の小屋を回るんだ」

「じゃあ、回りきったら、また戻ってきてくれよ」

と、別の入夫が立ち上がり、小屋の隅すみになぜか置いてあったたこを持つてきた。

「こいつにも酒を吞ませなきゃ」と、その者がいった。見れば、誰が書いたものか、槌の頭に部分に大きく『もれる』と記してある。

「このたこはよ、おれと一緒にモレルさんが使っていたんだ。なあ、モレルさん、もうすぐ築堤が出来上がるぜ。喜んでくれよなあ」

涙ぐんでいる者もいた。

「あと少しだ。気張きばってくれよ」

重太郎が声を張り、小屋が壊れるほどの声が皆から上がった。

夜半やはんから、雨が降り出した。厚い雲に覆われていたこともあって、重太郎が休みにしたのは正解だった。おそらく今夜は皆呑み続けて、

明日は一日寝ているだろう、と弥市は苦笑しながら、床とこについた。

夜中、屋根を叩く雨の音で眼を覚さました。ひゆるひゆると風が鳴いている。こんな時季に珍しいな、と弥市は思った。ここ二、三日、梅雨空つゆぞらのような色をしていた。波も少し高かった。だが、傾斜面の石垣を越えることはない。うまく波を逃しているのだ。弥市はそれを見て、築堤の造りに自信を持っていた。

尾張屋嘉兵衛に後を託した。森田屋もいる。本当なら線路がすっかり敷かれるところまで見たかったが、肥後に急かされている。

やれやれ、寝るかと思蓋まぶたを閉じた。明日は休みと安心したためか、深い眠りに入ったのだろう、常吉の喚わめき声に叩き起こされた。

「朝っぱらからうるせえ。今日は休みだろう？」と怒鳴ったが、常吉の顔から色が失われていた。「旦那さま」と情けない声を出した。

雨はまだ降り続けている。風も強い。ぞわり、と総身あわだが粟立あわたった。「支度をする」

弥市は夜具から飛び出して、すぐさま着替えをすると、蓑と笠を着け、表に出た。

うっ。息が詰まるほどの風雨だ。こんな時季に？ 蓑はたちまちぐつしよりと雨を含んで歩きづらい。邪魔だとばかりに脱ぬぎ捨てた。常吉とともに東海道を走った。息が切れる。

横殴りの雨が弥市を襲う。

南の築堤かすが霞かすんで見える。海岸にもやっである小舟が激しく揺れていた。通船口から、波が押し寄せているのだろう。それでも波は築堤を越えていない。助かった。

大木戸を過ぎて、さらに進む。この嵐で人ひとり歩いていない。今は何刻なんどきなのか、空が暗過ぎて見当もつかない。

頼む。頼む。またも身体が粟立あわたつ。

「旦那さま、北の人夫が——」

「いうな。いうんじゃねえ。おれがこの眼で確かめる」

衣装が濡れて重くなる。雨足で前もよく見えない。だが、前方に人が大勢集まっていた。さらに急ぐと、人夫たちだった。

嫌な予感がする。人夫たちが弥市を振り返り、何かいいたそうな顔をした。堤の上に誰か立っている。重太郎だ。

「重太郎さん！」

弥市は、渡り道を駆け、堤を上がった。

絶句した。

「旦那さま、それ以上、行っちゃいけねえよ、危ねえよ」

常吉の声が雨の音に紛れて聞こえた。弥市の目の前に広がっていたのは、基盤を露出させ、ぐずぐずに崩れた堤だった。

流れ出た土は泥に姿を変えて、海の色を染めていた。砂利はその中に埋もれている。白い波頭が幾度も打ち寄せる。

重太郎が振り返った。もうどれだけ佇んでいたのか、鬚がずり落ちて、明らかに衣装から流れるように水が滴り落ちていた。その眼は何かに怯えるようにも怒りを含んでいるようにも見えた。

「どうしてこんなことになったんだ。盛り土も締め固めた。砂利も積んだ。あとは石垣を積むだけだったんだ。くそっ。なんだってんだ。もうすぐ完成だったんだぞ」

重太郎がいきなり斜面を降りた。波が足許を濡らす。

「今すぐ直すんだ！ 直すんだ」

重太郎は海水を含んだ泥に足を膝まで埋めながら、喚いた。土を両腕でかき集め、砂利を掻き出した。その重太郎を波が襲う。

「危ねえ。上がってきなせえ！」

「もうすぐだったんだぞ。もうすぐだったんだあー」

空を仰いで重太郎は吠えた。

弥市も斜面を降り、重太郎を抱きかかえた。足がずぶずぶと沈んでいく。

「抑えてくたせえ。抑えてくれ。基盤は無事だ。造り直せる。造り直すんだ」

「わああああー、わああああー」

重太郎が弥市の腕の中で、咆哮ほうこうした。それは、天を突き通すように、上がっていった。

五

工部省に召し出された弥市は、椅子いすから立ち上がり怒鳴った。

「崩れた築堤を直している最中に、なぜおれに抜けるというんです。

おれは、完成するまで函館には行かねえ。行けるもんか」

椅子に座って厳しい顔を向けた肥後は、
「北海道の新道も急いでいるのだ。お前の腕を買ってのことだ。お前も得心してのことであつたではないか。もう予定は変えられん。この通り、頼む」

肥後が頭を下げた。

だが、弥市は無言で身を翻し、部屋を出た。

冗談じゃねえ。

どうしてわかってくれねえのだ。肥後も、おれが鉄道に憧れを持っていることは知っているはずだ。まだ鉄道敷設の話が決定されていない頃に、八ツ山の切り割りを請け負わせてくれたのだ。

それでも、北海道へ行けというのか。

だから役人は嫌なんだ。

弥市は高輪の出張所に戻ると、寝間ねまに入つて酒を呑んだ。予定通りであれば、すでに築堤は完成していた。それを見届けてから、北海道へ行くことを肥後は認めてくれていた。

あの嵐で竣工間近の堤が崩れたのは不慮ふりよの災難だ。それを修復し、完成まで持つていく。それくらいの期間も待つてくれないのか。あと数ヶ月。築堤竣工の遅れが、鉄道開業にも響いている。

井上の話では、まず横浜から品川の仮営業を行うという。

落胆とともに、悔しさで身を絞られる思いがした。

おれたちのせいだ、と重太郎も自分を責めている。しかし、嵐ではどうにもならない。

土工仕事にはついて回ることだ。誰のせいでもない、森田屋も尾張屋も慰めた。

何が新道を急いでいるだ。今から函館に渡ったところで、雪に閉ざされて何も出来ないのではないか？

弥市は茶碗酒を呷る。だが、ちつとも酔えない。

ただ、海に延びる築堤の姿だけが脳裏に浮かんでいた。やはり、宮仕えなんぞ、やめちまいてえ。

これまで請負人として、大仕事をこなして名を馳せた。それを捨てて、今更月の手当をもらったところでなんになる。久治郎はおれとは違う。

モレルが積んだ石垣を食い入るように見つめていたのを思い出す。久治郎は、西洋の技を目の当たりにして思うところがあつたのだろう。その後、肥後から亜米利加人が引いた汐留と横浜両停車場の絵図面を見せられて、大工としての血が騒いだといっていた。腕が鳴いたに違いない。

だけど、おれは——蒸気車をこの国に通したかった。

鉄路を拓く。その一念でやって来た。

だからこそ、おれは完成を見てえのだ。

「旦那さま、いらっしやいますか」

中吉が障子の向こうから呼びかけてきた。

「尾張屋さんがお見えになつております」

通してくれ、とぶつきらぼうに弥市はいった。

尾張屋は、寝間に入ってくるなり、徳利とっくりに眼を落とした。

「なんだい、昼間からご機嫌だね。工部省の帰りに、普請場に寄ると思つていたんだがねえ。姿を見せないから、こつちから押しかけちまつたよ」

「皮肉ですかい？ 嫌味ですかい？」

尾張屋は腰を下ろすと、笑みを浮かべた。

「そんな意地の悪いこたあいわねえよ。工部省はどうしたい？」

「どうもこうもありませんや。築堤は途中で抜けて、函館に行つてくれと頭下げられちまいました。冗談じゃねえや。築堤だけに力を注いできたんだ。出張所を設けて、店も畳んで、家にはほとんど帰つてねえ。おれは、完成だけは見たいといった。それを許してくれねえんですよ」

「なあ、弥市さん。あんたが蒸気車好きなのはよく知っているよ。

ずいぶん前の恵比寿講えびすこうで、おれに望みは何かと聞いてきたときには面食めんくらつたがね」

尾張屋が柔らかな眼を向けてきた。

「築堤はもう大丈夫だよ。重太郎さんや、お前さんところの常吉さんも立派にやっているじゃないか」

「おれが、得心いかねえんですよ。これがおれの最後の仕事だと思
い極めて、やってきた。それが完成間近に抜けるといわれたって。
急に梯子を外された気分です。やりきれねえんですよ」

弥市は湯呑み茶碗に酒を注ぐ。

尾張屋が、ふむと唸って、腕を組む。

「あんたはあの時、日の本のための普請が出来りやいと、自分の
ことをそう語った。それは蒸気車を通すことでもあったんだろうさ。
いわせてもらえば、国のための仕事は蒸気車だけじゃねえ。函館、
札幌の新道を造るのも日の本のためだろう？」

弥市は押し黙る。

「それと、歳を感じて隠居するつもりだった森田屋にも、いったそ
うじゃないか。これまで培ったものを繋げつてよ。十分、若い奴ら
には繋がっているとおれは思うよ。なあ、弥市さん、奴らに、自分
たちが成し遂げたという達成感を味わわせてやんな。あんたはもう
幾度も感じてきたろう？　それが自信になつてきたはずだ、そうだ
ろう？」

尾張屋が腰を上げた。

弥市は、茶碗の酒をじっと眺めた。

成し遂げたという達成感。皆で造り上げたという充足感。

「尾張屋さん！」

弥市は茶碗を置いて、寝間を飛び出した。

明治五年二月二十八日、弥市は、職人、人夫、五百人とともに品川から船に乗り、北海道へ発った。前日には、別れの会を開いた。名を弥市から弥十郎やじゅうろうに改め、九歳になった松之助に弥市を継がせた。北海道函館に到着した弥十郎は、その寒さに身を震わせながら、地を踏み締めた。

ここから、また始まる。

まだまだ、おれもこれからだ。

鉄道は、五月の品川く横浜間の仮営業から始まった。高輪の築堤の竣工が遅れたためだ。そして、九月十二日、華々しい開業式を迎えた。

開業式のこと、新橋へ見物に行った重太郎の文によって知らされた。

新橋、横浜の停車場には万国旗が渡され、紅白のほおずき提灯が吊るっされた。提灯飾りは、鉄道頭の井上の発案だったというのには、あの方らしいと笑った。

新道を通すため忙しい日々を送っていたが、函館に雪が降り、工

事が滞とどまったのを機に、弥十郎は、東京に帰ろうと思立しつた。

十一月二十一日、弥十郎は、函館から蒸気船に乗り、横浜へと向かった。函館から横浜までは、約二日の旅だ。

船旅は順調に進み、二十三日の早朝、横浜港に到着した。

蒸気船から小舟に乗り換え、棧橋さんばしへ向かう。暁闇ぎょうあんに沈む海上を、舳先へさきの灯りあかを頼りに進む。

こちらも冬ではあるが、函館よりも断然暖かい。

「せっかく戻るんだ、必ず蒸気車に乗れよ」

函館出港前に久治郎にいわれた。とはいえ、まだ蒸気車が走る時間ではない。それまでの時をどう潰すか。嘉右衛門に会いに行くのもいいかと思つたが、弥十郎は、波止場から海岸通りを山手の方へと歩き出した。

朝日が上り始めた。いい天気だ。

モレルの墓参りだ。

弥十郎は、外国人墓地までの坂を上る。

墓地には着いたが、変わった形の墓石にも面食らい、すべて異国語で刻まれているため、モレルの墓がどれだか見当がつかなかった。

英語に堪能な徳松たんのうだったら、見つけられたのかもしれない、と苦笑した。

仕方がないと、弥十郎は墓地に向かつて、手を合わせ、踵きびすを返し

た。

山手を降りて、海岸通りを歩く。馬車が通り過ぎて行く。沖には異国船が幾艘も停泊している。どこの国のものであろうか、軍艦もあつた。

賑やかな税関をちらと覗いて、ようやく開いた蕎麦屋で腹を満たした。

蒸気車は、午前三本、午後四本、新橋と横浜を往復している。

横浜停車場の前には水場があつた。噴水ふんすいというのだそうだ。横浜にはやはり異国の物が不思議と溶け合とう。

新橋発午前十時。横浜着午前十時五十三分だ。

ああ——。

線路を走る蒸気車が見えた。黒い煙を吐きながら、音を立てて走ってくる。

まことに蒸気車が走っている。

弥十郎の胸が震えた。夢にまで見た蒸気車だ。

機関士は外国人だと聞いていた。日本人はその機関助手として同乗している。近いうちに、機関士も日本人となるのだろう。

停車場は白く美しい木骨石張りもっこいしばだった。三角の屋根が印象的だ。汐留から新橋停車場と名前を変えた駅舎と同じ形をしているという。久治郎はこの駅舎の絵図面を見て、大工であつた自分を思い

出した。

おれはどうだろう。モレルが履いていた長靴を見ても、最初の生業であった下駄を思い出しもしなかったが、と笑う。

品川まで切手（切符）を買う。

切手は、上等、中等、下等とある。弥十郎は迷った末、下等を買った。金一分一朱だ。上等だと三分三朱。横浜から新橋までだと、一両二朱。まだまだ庶民には手の届かない乗り物だろう。誰もが気軽に利用出来るようになるまで、どれだけかかるのか。

お蝶は、品川で茶店を開いている。いきなり顔を見せたら驚くだろう、と弥十郎は悪戯いたずらっぽく笑い、肩を揺らした。

停車場に入ると、やはり異人が多く、日本人は身なりのいい者が目立っていた。

ふらっとほらむに蒸気車が入ってくる。黒く光った蒸気車は、思ったよりも大きかった。しゅうしゅう音を立てている。

とうとう、乗れる。まるで童わらわのように心が躍おどった。心の臓ぞうが激しく脈打つのを感じた。

足先が震えるのを、懸命に堪えて、乗り込んだ――。

中は質素な作りだった。木でしつらえた椅子に腰掛ける。

ガタン、と大きな音がして、蒸気車が走り出す。

一瞬、身体が後ろに引つ張られるような気がした。窓の外を見る

と、景色が後ろに飛んで行った。

なんてこった。まるで、飛んでいるようだ。

すぐに、高島屋嘉右衛門が造った築堤の上を走る。

弥十郎は背もたれに背を預けた。

込み上げるものがあつた。夢の鉄路がまことになった。

胸が詰まる。嗚咽が洩れそうになる。

六郷川の橋梁を渡る。この長い橋を架けることも困難だったと聞く。

「うわあ、すげえや。やっぱりすげえ」

川崎の停車場から乗ってきたであろう、まだ七つかそこらの童が声を上げながら走って来ると、窓から身を乗り出した。

はっとした弥十郎は、

「おい、危ないぞ」

童の帯を掴んで、引っ張った。

「何するんだよ。おいらは、海を眺めるのが楽しみで陸蒸気おかじょうきに乗せてもらったんだ」

童は気の強そうな眉をひそめて、弥十郎をぐっと見据える。

「落っこちたら海を眺めるどころじゃねえぞ。蒸気車ん中ではおとなしくしてろ」

弥十郎が諫めると、童は唇を尖らせたが、存外素直ひんせに頷き、弥十

郎の隣にちよこんと腰を下ろした。

「蒸気車じゃないよ、陸蒸気だよ」

ああ、そうか、と弥十郎は笑う。世間では陸蒸気と呼ばれているのだった。

「ぼうず。おつ母さんかお父つつあんは、どこだい？」

「おつ母さんがとなりの車にいるよ。お父つつあんは朝早く出て、新橋すてんしよんで待っててくれるんだ。下等でも川崎から新橋まで切手は三朱するから、お父つつあんは歩いて行ったんだ。おいらは七つだから、銭を払わなくていいからさ」

なるほど、と弥十郎は得心しながらも、やはり蒸気車は贅沢ぜいたくな乗り物なのだとあらためて思う。

「なあなあ、おじさんも陸蒸気に乗るのは初めてかい？」

隣に座る童が弥十郎を見上げていった。弥十郎は苦笑した。

「本当にすごいよ、陸蒸気ってさ。空を飛ぶみてえに速いんだ」

「その通りだな。陸蒸気は好きかい？」

うん、と大きく返事をした。

「大きくなったら工部省に入んな。そこに鉄道寮つてのがある。陸蒸気を日本中に通すために働くところだ。そこには、鉄道が大好きな人が大勢いる」

弥十郎はそう語りながら、井上や武者の顔が次々浮かぶ。

童が眼をぱちくりさせた。

「違うよ、おじさん」

「何が、違うんだよ。陸蒸気が好きなんだろう？ だったら——」

「品川のすてんしよんを過ぎたら、陸蒸気はどこを走るか知ってるかい？」

童が頬を紅潮こうしやうさせて、弥十郎の顔を覗き込んでくる。

「そりゃあ、六郷川の橋もすごいけどさ、品川から芝は海の上なんだ。すごいだろう。それにさ、鉄の塊かたまりみてえな陸蒸気がいくら走っても、びくともしないんだって。お父つつあんに訊いたら、堤は半里り（約二キロメートル）以上もあるっていうんだ。おいら信じられねえから乗せてくれて駄々だだこねたんだ。そんな長い堤を海の中に造っちまったんだ。ほんとにすごいよ。誰が造ったのか知らねえけど、すげえよ」

瞳を輝かせ、両腕を広げた。

「だからさ、おいらもさ、みんながあつと驚くようなでっかい物を造りたいんだ。それ見て、みんなが喜んだら、もつと嬉しい」

男はでかい物に惹ひかれるといった勝のことを思い出す。

なんてこたあねえや、男はいつまで経ってもガキなんだ。

「ああ、そうかい。そいつはいいなあ。けどな、ぼうず、でかい物はひとりの力じゃ造れねえ。大勢の人の気持ちが一緒になんきや

いけねえんだよ。覚えときな」

童は驚いた顔で弥十郎を見たが、すぐに大きく頷いた。

跨線橋である八ツ山橋を潜り、品川停車場に着いた。

弥十郎は一度下車してお蝶の店に寄るつもりでいたが、やめた。

お蝶は新たな暮らしを始めたのだ。このまま、この童と新橋停車場まで行くことにしよう。切手は差額を払えばいい。

再び蒸気車が走り出す。

「あ！ ほら、もうすぐだよ。海の上の堤を通るよ、おじさん」

童が指を差し、窓に張り付いた。身を乗り出さないのは弥十郎にいわれて我慢しているのだろう。

「ぼうず、おじさんが支えてやろう。しっかり堤を見るんだぞ」

弥十郎は童の身を抱え、ともに窓から顔を出した。

しゅっしゅっ。蒸気車は、煙を吐き、鉄の車輪が轟音をたてて築堤を走る。

うつすらと朱に染まった雲が、凧いだ海が弥十郎の眼に映る。

傾斜した石垣に波が寄せている。

高輪の通船口の木橋を、漁から戻る小舟が潜るのが見えた。

近代化の象徴だの、黎明だの、そんな大層なことを掲げなくてもいいのだと、弥十郎は思った。童ひとりに認められたことが、なにより嬉しかった。幼心に刻まれた思ひは、きっと未来に繋がって

く。

鉄路を拓き、鉄路はさらに延びる。この築堤を通り、日本中に広がっていく。

そうだ、井上さんに会いに行こう。夜通し、酒を酌み交^くわしながら蒸気車の話をしよう。

「ほらほら顔を上げろ。芝の方まで続く堤が見渡せるぞ」
弧を描く海岸線に沿って弓のような形に造られている。

童が首を伸ばして、左を眺めて、歓声を上げた。

「ほんとだあ。わあ、きれいだな。石垣に波が打ち寄せてるよ」

「ああ、美しいなあ」

弥十郎は眼を細め、長く延びる築堤を眺めた。

∧
了
∨